

悪性腫瘍患者における実臨床データを用いた 薬物治療に影響を与えるリスク因子に関する研究

国立病院機構北海道がんセンター 薬剤部

梅原健吾

Kengo Umehara

この度は、「医療薬学」誌への寄稿の機会をいただき、大変光栄に存じます。本稿では、私が学位研究を通して得た経験と、研究の背景にある思い、今後の展望について述べさせていただきます。

研究のきっかけ

私が研究を始めたきっかけは、日常業務における臨床的な疑問（Clinical Question）を研究テーマ（Research Question）へと昇華させるプロセスに魅力を感じたことです。病院薬剤師として、患者さん一人一人の状態に合わせた最適な薬物治療を提供したいという強い思いがありました。しかし、臨床現場では、教科書的な知識だけでは解決できない問題に直面することも少なくありません。そこで、実臨床データを分析することで、患者さんの個別の特性や背景が治療にどのように影響するのかを明らかにしたいと考え、研究に取り組みました。

研究の道のりと苦勞

研究を進める中で、最も苦勞したのは、実臨床データの質の確保と解析です。電子カルテに記録されたデータは、研究目的で収集されたものではないため、欠損値や誤記などが含まれている場合があります。これらのデータをクリーニングし、解析可能な形に整える作業は、非常に時間と労力を要しました。また、統計解析についても、指導

教授のご指導を受けながら、適切な手法を選択し、結果を解釈することに苦心しました。

特に、第1章で取り扱ったPemetrexedによる腎機能低下に関する研究では、患者さんの腎機能の変化を長期にわたって追跡する必要性がありました。そのため、数年分のデータを収集し、解析しましたが、患者さんの状態は様々であり、一筋縄ではいかないことの連続でした。しかし、地道な作業を続けることで、Pemetrexedの長期曝露が緩徐な腎機能低下を引き起こす可能性を示唆する結果を得ることができました。

第2章、第3章では、免疫チェックポイント阻害剤であるNivolumabの治療効果因子を検討しました。これらの研究では、従来のバイオマーカーとは異なる、患者さんの背景や一般的な末梢血液検査から治療効果を予測する因子を見出すことを目指しました。しかし、治療効果に影響を与える因子は多岐にわたり、交絡因子を考慮しながら解析を進める必要性がありました。何度も解析方法を見直し、議論を重ねることで、Nivolumabの効果予測に繋がる新たな知見を得ることができました。

研究を通して得たもの

研究を通して、私は多くのことを学びました。まず、臨床現場での疑問を研究テーマに昇華させ、

解決していくことの重要性を改めて認識しました。また、実臨床データを用いた研究の難しさと、それにも関わらず得られる成果の大きさを実感しました。そして、何よりも、患者さんのために、より良い医療を提供したいという思いが、研究を続ける上での大きな原動力となることを学びました。

今後の展望

今回の学位研究で得られた成果は、今後の医療薬学の発展に貢献できるものと考えています。今後は、これらの成果を実臨床に還元し、患者さん一人一人に最適な薬物治療を提供できるよう、さらなる研究に取り組んでいきたいと考えていま

す。また、薬剤師として、臨床現場での疑問を大切にし、研究マインドを持って日々の業務に取り組むことで、医療の質の向上に貢献していきたいと考えています。

本研究に際して、御指導と激励を賜りました元北海道科学大学 佐藤秀紀教授に謹んで深甚なる感謝の意を表します。また、本研究の遂行にあたり、温かい御支援、御協力、多くの御理解をいただきました恵愛会札幌南三条病院ならびに国立病院機構北海道がんセンターの皆様にご心より感謝いたします。最後に、北海道科学大学大学院特別研究生での生活を、多大なる理解を持って陰ながら支えてくれた家族に心から感謝致します。